

(談話)

弥富相生山線の当初の道路計画通りの工事再開に反対する

——広沢市長の「一般車両も通行可能な折衷案の早期実現」表明にあたって

2025年11月26日 日本共産党名古屋市議団団長 田口一登

一、2025年11月21日に開かれた市議会本会議で、工事が中断している相生山の道路＝弥富相生山線について広沢一郎市長は、「一般車両の通行も可能とする折衷案をできるだけ早期に実現できるように努力する」と答弁した。弥富相生山線をめぐっては、地元住民の間に早期開通を望む声がある一方で、ヒメボタルが生息する相生山緑地の自然環境に与える影響から建設中止を求める声があり、河村たかし前市長は、双方の住民の意見を直接聞いた上で、「道路事業は廃止する」との方針を表明していた。今回の広沢市長の議会答弁は、道路事業廃止の方針をなし崩し的に転換するものにほかならず、地元住民の様々な意見を直接聞く機会を設けないままでの表明であり、極めて遺憾である。

一、広沢市長が答弁で、「工事再開」とは明言せず、「折衷案の早期実現」と述べたことは、2つの点で不明朗さを残している。

第1は、折衷案と当初の道路計画との関連である。折衷案とは、「自然環境と人の暮らしが共生する相生山のみち」というビジョンのもと、弥富相生山線の未整備区間（約180m）のつなぎ方を検討するというものであり、名古屋市が示していた折衷案は、緊急車両だけは通すというものだった。それを「一般車両も通行可能」にするためには、すれ違いができる片側1車線の道路が必要になる。そうすると当初の道路計画通りとなり、折衷案とはならないのではないか。「夜間の一般車両の通行制限」や「ヒメボタルに影響がない照明」などの環境への配慮は、当初の計画でも検討されていたことであり、これをもって折衷案とは言えない。「折衷案」と言いながら、「当初の道路計画通り」に工事を再開するならば、市民を欺くものと言わなければならない。

第2は、折衷案と道路廃止方針との関連である。河村前市長は、昨年9月定例会での日本共産党市議の質問に対する答弁で、「折衷案の成案を得た上で、早く都市計画審議会にかけて道路の廃止を提出せよと私は言っている」と述べた。折衷案と道路廃止方針は矛盾すると考えるが、それでも前市長は道路廃止の方針に変更がない考えを示した。広沢市長は答弁で、都市計画の存廃や見直しについては言及していない。広沢市長は市長選挙で、「河村たかしの政策を丸ごと継承する」と公約したのだから、相生山の道路事業廃止の方針も継承すべきである。

一、名古屋市は、早期開通を望む人たちの最大の理由である周辺地域への車両の入り込み対策や島田・野並両交差点の渋滞緩和対策を講じてきており、幹線街路としての弥富相生山線の必要性の根拠は希薄になっている。一方で、生物多様性の保全の見地から相生山緑地の自然環境を保全する重要性が一段と増している。日本共産党市議団は、当初の計画通りの工事再開に反対し、相生山の自然を守るために市民のみなさんと力を尽くす。